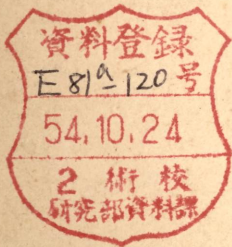


軍制學教科書海軍治罪法

海軍機關學校

生徒第三學年

大正八年二月



海軍機關學校長 船橋善彌

大正八年二月

本書ニ依リ軍制學(海軍治罪法)ヲ修得スヘシ

第三版 大正八年二月 全 全 杉山義太郎

第二版 明治四十四年七月 全 全 全

第一版 明治三十九年五月 教官 海軍主理 高島 愿

發行年月

廿九日

赤羽

本書ニ対シ軍備學(海軍當果志)ヲ對稱スヘシ

大正八年二月

海軍對關學對員 齋 謙 善 齋

裁判官目録

第一編 裁判官三十三名目録

最高裁判所 最高裁判官

第二編 裁判官四十四名目録

高等裁判所 高等裁判官

第三編 裁判官八十二名目録

地方裁判所 地方裁判官

海軍治罪法例

本書中往々法律ノ條文ヲ採用スルニ方リ略語ヲ用井タリ次ノ如シ、

- 一、 刑第何條トアルハ刑法第何條ノ略ナリ、
- 一、 刑訴第何條トアルハ刑事訴訟法第何條ノ略ナリ、
- 一、 海刑第何條トアルハ海軍刑法第何條ノ略ナリ、
- 一、 海治第何條トアルハ海軍治罪法第何條ノ略ナリ、
- 一、 海治執第何條トアルハ海軍治罪法執行法第何條ノ略ナリ、

四、 刑事訴訟民事訴訟 9

五、 公訴私訴 9

六、 公訴私訴ノ差異 10

第一節 公訴 12

七、 公訴權ノ發生 12

八、 公訴權ノ獨立并其ノ除外 13

九、 公訴權ノ消滅 18

第二節 私訴 16

一〇、 私訴權ノ發生并行使 16

海軍治罪法目録

緒言	1
本論	5
第一編 總則	5
第一章 軍法會議	5
一、裁判所	5
二、司法權	6
三、裁判所ノ種類	7
第二章 海軍軍法會議ノ沿革	8
第三章 海軍軍法會議ノ裁判權	8
四、刑事訴訟民事訴訟	9
五、公訴私訴	9
六、公訴私訴ノ差異	10
第一節 公訴	12
七、公訴權ノ發生	12
八、公訴權ノ獨立并其ノ例外	15
九、公訴權ノ消滅	18
第二節 私訴	26
一〇、私訴權ノ發生并行使	26

一、私訴權ノ消滅	27
第三節 違警罪ノ正式裁判	29
第四節 海軍軍法會議ノ裁判權ニ服スヘキ者	29
第四章 海軍軍法會議ノ種類及ビ構成	31
第一節 種類	31
第二節 構成	31
第三節 職員ノ任命	34
第四節 職員ノ除斥	36
第五章 軍法會議ノ管轄權限	38
一、東京軍法會議	38
二、各鎮守府軍法會議	38
三、艦隊軍法會議	39
四、高等軍法會議	40
五、合圍地軍法會議	40
六、臨時海軍軍法會議	41
第六章 管轄權限ノ移轉併合	44
第二編 海軍檢察	44
第一章 海軍檢察ノ意義	44
第二章 海軍檢察ノ機關	44

一、海軍檢察官	45
二、各廳長艦船營長	46
三、憲兵ノ將校、下士豫審判事、檢事、司法警察官	47
四、憲兵、卒、巡查	47
五、海軍警査	47
第三章 海軍檢察ノ手續處分	48
六、捜査	48
七、告訴告發ヲ受ケタル場合ノ手續	48
八、現行犯ノ軍人ヲ逮捕シ若クハ其ノ交附ヲ受ケタル場合	50
九、自首ヲ受ケタル場合ノ手續	50
一〇、私訴ヲ受ケタル場合ノ手續	50
一一、檢察處分終了ノ手續	51
一二、起訴ニ關スル長官ノ命令	54
第三編 審問	57
第一章 審問ノ概説	57
第二章 審問手續	58
第一節 被告人訊問	61
一、令狀	61
二、責附	67
三、被告人訊問ノ手續	68
第二節 證人訊問	70

	頁
四、 證人	70
五、 證人ノ呼出	75
六、 證人訊問ノ手續	76
第三節 鑑定	79
七、 鑑定人	79
八、 鑑定人トナルノ義務并ニ其ノ義務 ナキ者	80
九、 鑑定人ヲ命ズベキ場合	80
一〇、 鑑定人任命ノ手續	81
一一、 鑑定ノ方法	81
第四節 臨檢、家宅搜索、物件押收	82
第五節 共犯、附帶犯若クハ餘罪ノ覺舉	83
第六節 審問終結ノ手續	85
一二、 共犯常人ノ處分	85
一三、 有罪ニシテ管轄ニ屬スルトキノ手續	85
一四、 非管轄若クハ免訴トナスベキ場合 ノ手續	86
一五、 被告人死去シタル場合ノ手續	86
第四編 判決	87
第一章 判決ノ開始	87
第二章 開廷準備	88
第三章 開廷	88

	頁
第四章 法廷ノ取締及訴訟ノ指揮	89
第五章 審判	90
一、 被告人ノ人別調	90
二、 書類ノ讀示	90
三、 被告人訊問并ニ證據調	90
四、 判決ノ成立	92
五、 判決ノ書ノ作成及其ノ作成條件	93
六、 判決ノ具申及之ニ對スル長官又ハ大 臣ノ職務	94
七、 裁判宣告	95
八、 闕席裁判	95
九、 高等軍法會議ノ判決	96
一〇、 判決始末書	96
第五編 再議及再審	97
第一章 再議	97
一、 再議ノ原因及命令	97
二、 再議ニ於ケル訴訟手續	98
第二章 再審	98
三、 再審ノ原因	98
四、 再審ノ命令	100
五、 再審ノ訴訟手續	101

第六編 裁判ノ執行	頁
一、無罪、免訴、財産刑、自由刑	103
二、再審裁判ノ執行	103
三、勞役場留置	103
四、死刑執行	103
五、刑ノ執行猶豫	104

海軍治罪法

緒言

海軍治罪法、トハ海軍ニ於ケル刑事訴訟ノ手續方法ヲ規定シタル法規ニシテ普通ノ刑事訴訟法及ビ陸軍ノ陸軍治罪法ト相對シテ其ノ性質ヲ同フスルモノナリ、

刑事訴訟法モ海軍治罪法改正ノ當時（明治二十二年二月十二日法律第五號）ハ尙ホ治罪法ト稱シタルモ後民事訴訟法出タル後之ト對稱スル便宜アルト治罪法ナル名稱ガ糺問主義ノ臭氣ヲ帶フルガ如キ語弊アル等ノ爲メ今ノ名稱ニ改メタルモ其ノ實ハ治罪法ト云フモ刑事訴訟法ト云フモ別ニ異ルコトナシ、

治罪法ノ目的及効用、治罪法ノ目的ハ刑罰法ヲ適當ニ運用シテ有罪ヲシテ法網ヲ免レシメ又ハ無辜ヲシテ冤枉ニ泣カシムルガ如キ弊ナカラシメントスルニ在リテ其ノ効用モ亦茲ニ存ス夫レ刑法其ノ他ノ刑罰法ガ如何ニ善美ニシテ金科玉條ト稱スヘキモ開ハ唯犯罪行爲ト之レニ課スベキ刑罰トヲ定メタルニ過ギズシテ其ノ果シテ犯罪行爲ナリヤ否ヤハ如何ニシテ判定スベキヤ如何ニシテ所定ノ刑罰ヲ當行スベキヤハ毫モ規定セザルガ故ニ其ノ手續方法ヲ定ムル一定ノ法規ナクンバーニ當局有司ノ專斷私擅スル事トナリテ折角ノ金科玉條モ些シモ用ヲ爲サ、ルノミナラズ國家ノ治安ヲ維持スル所以ノ刑罰法ガ却テ治安ヲ害ス

ルノ具トナルニ了ラン治罪法ハ實ニ刑罰法ヲ運用スルニ必要ナル手續方法ヲ規定シタル法律ニシテ刑法其ノ他ノ刑罰法ト相俟ツテ初メテ國家刑罰權ノ實行ヲ鞏固ニシテ以テ有罪ヲシテ法網ヲ免レシメ無辜ヲシテ冤ニ泣カシムルガ如キ弊ナキヲ期スル所以ナリ之ニ依テ之レヲ見ル刑罰法ト治罪法トノ關係ハ目的ト手段トノ關係ニシテ恰モ民事ニ於テ民法ト民事訴訟法トノ關係ニ同ジク刑罰法ハ刑事訴訟ニ於テ達セントスル目的其レ自體ノ規定ニシテ治罪法ハ其ノ目的ヲ達スルニ必要ナル手段ニ干スル規定ナリ換言セバ一ハ直チニ罪ノ存在ヲ規定シ他ハ罪ノ有無ヲ定ムルニ必要ナル手續ナリ故ニ學者ハ刑法其ノ他ノ刑罰法ヲ實體法又ハ主法ト云ヒ治罪法ヲ形式法又ハ助法ト稱ス、

治罪法ノ主義、治罪法ノ主義ニ古來二主義アリ曰ク彈該主義曰ク糺問主義之レナリ、

彈該主義ハ一ノ犯罪アルトキハ先ヅ彈該者アリテ原告トナリ被彈該者之ガ被告トナリ兩者相對シテ訴訟ヲ爲スモノニシテ裁判官ハ其ノ中間ニ在リテ全ク局外中立ノ地位ニ立チテ判斷ヲ下シ其ノ審理判決ハ公行ニシテ辯護人ヲ附シ口頭辯論ニ依ルモノトス、

糺問主義ハ裁判官ニ於テ告訴告發ヲ受ケ又ハ世評或ハ嫌疑ニ依リテ罪アルコトヲ知リタルトキハ彈該アルヲ俟タズ自カラ職權吟味ヲ爲ス其ノ吟味タル諸般ノ證據ヲ搜查シ臨檢ヲ爲シ被告人及ビ證人ヲ訊問シ鑑定ヲ命ジ其ノ他諸般ノ搜查ヲ爲シ其ノ結果ヲ書面ニ認メ其ノ書面ニ基イテ裁判ヲナスモノニシテ其ノ裁判官ノ行動ハ總テ秘密ニナシ決シテ之ヲ公行スルコトナシ夫レ此ノ如ク糺問法ハ裁判官自ラ其ノ職權ヲ以テ審判スルモノニシ

テ彈該者ナキガ故ニ裁判アル前ニ在テハ如何ナル罪ニ依リテ吟味ヲ受クルモノナルヤヲ知了セザル場合アリ、

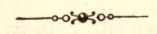
以上ハ二主義ノ大要ナリ現今各國ノ治罪法ハ必ズ絶對ニ一方ニ依ルモノナク何レモ二者ヲ折衷シテ採用セリ雷異ナル所ハ二者孰レニ多ク傾クヤニ在ルノミ我國ニ於テモ刑事訴訟法ハ檢事ノ起訴ヲ以テ訴訟受理ノ要件トシ被告ノ口頭辯論ヲ聽キテ裁判ヲ爲シ又辯護人ヲ許シ審判ノ公開等ノ主義ヲ採リタルヲ以テ頗ル彈該主義ニ傾ケリ但シ豫審制度ハ秘密ニシテ職權吟味ニ涉ルコト多ク糺問主義ヲ襲蹈セリ之レニ反シテ海陸軍治罪法ハ審判ハ秘密ニシテ公開セズ被告人ニ辯護人ヲ許サズ口頭辯論ニ依ラズシテ書面ニ依リ訴訟ハ必ズシモ檢察官ノ起訴ヲ俟タズ裁判官ノ職權吟味ニ任ズル場合尠カラザルノミナラズ特ニ海陸軍治罪法ノ著シク刑事訴訟法ト異ナル點ハ軍衙ニ在リテハ檢察官并ニ裁判官ノ上ニ軍政長官アリテ治罪ニ干與シ檢察官ノ起訴モ其レ自身ニテハ裁判權ノ發動ヲ促スニ足ラズ長官ノ命令ヲ俟テ初メテ起訴ノ効アリ又裁判官ノ裁判モ其レ自身ニテハ宣告執行力ナク必ズ長官ノ認可ヲ要スルガ如キ檢察官裁判官ハ一ニ軍長官ノ命令ノ下ニ働ク機關トシテ裁判ハ恰モ軍長官ノ命令ノ如キ觀アルニアリテ尤モ糺問主義ヲ採用セルガ如シ然レトモ今日訴訟法ノ主義トシテハ可成彈該主義ヲ採用スルニ努メザルベカラズ故ニ我海軍治罪法ノ如キモ之ヲ改メテ純然タル檢事制度ヲ設ケテ起訴權ヲ之レニ委ネ或制限ヲ以テ被告ニ辯護人添附ヲ許シ審判ハ口頭辯論ヲ基本トシ且ツ傍聽ヲ許シテ公開センコトニセントノ企アラントスト聞ケリ余ハ一日モ早ク改正ノ緒ニ就カンコトヲ希望スルモノナリ、

天皇ノ名ニ於テ法律ニ依リ裁判所之ヲ行フトアル之ナリ司法權トハ他ノ立法權行政權ト竝ンデ國權ノ一作用ヲ示スモノナリ立法權行政權司法權ト云フモ根本的ニ全然分離セル權利ニ非ズシテ固ト是レ一ノ全キ天皇ノ統治權ノ作用ヲ分類シタルニ過ギズ換言セバ天皇ガ國家ヲ立憲的ニ統治シ玉フニハ其ノ統治ノ方法トシテ政府議會及ビ裁判所ナル機關ヲ要シ立法事務ハ議會ニ行政事務ハ政府ニ司法事務ハ裁判所ヲシテ之ヲ行ハシムルト云フノ義ナリ、

天皇ノ名ニ於テ法律ニ依リ裁判所之ヲ行フトアル之ナリ司法權トハ他ノ立法權行政權ト竝ンデ國權ノ一作用ヲ示スモノナリ立法權行政權司法權ト云フモ根本的ニ全然分離セル權利ニ非ズシテ固ト是レ一ノ全キ天皇ノ統治權ノ作用ヲ分類シタルニ過ギズ換言セバ天皇ガ國家ヲ立憲的ニ統治シ玉フニハ其ノ統治ノ方法トシテ政府議會及ビ裁判所ナル機關ヲ要シ立法事務ハ議會ニ行政事務ハ政府ニ司法事務ハ裁判所ヲシテ之ヲ行ハシムルト云フノ義ナリ、

本論

第一編 總則



第一章 軍法會議、

軍法會議、ハ帝國憲法第六十條ニ所謂特別裁判所ニシテ通常裁判所ト相對シテ共ニ國家ノ司法權ヲ行使スル機關ナリ、

一、裁判所、ハ國家ノ司法權ヲ行フ機關ノ總稱ニシテ換言スレバ訴訟ノ審判ヲ掌ル官府ナリ帝國憲法第五十七條ニ司法權ハ天皇ノ名ニ於テ法律ニ依リ裁判所之ヲ行フトアル之ナリ司法權トハ他ノ立法權行政權ト竝ンデ國權ノ一作用ヲ示スモノナリ立法權行政權司法權ト云フモ根本的ニ全然分離セル權利ニ非ズシテ固ト是レ一ノ全キ天皇ノ統治權ノ作用ヲ分類シタルニ過ギズ換言セバ天皇ガ國家ヲ立憲的ニ統治シ玉フニハ其ノ統治ノ方法トシテ政府議會及ビ裁判所ナル機關ヲ要シ立法事務ハ議會ニ行政事務ハ政府ニ司法事務ハ裁判所ヲシテ之ヲ行ハシムルト云フノ義ナリ、

天皇ノ名ニ於テ之ヲ行フトアルガ故ニ司法權ノ實體ハ天皇ノ掌握シ玉フ所ニシテ裁判所ハ其ノ御名代トシテ之ヲ行フモノナルコト明ナリ民法上ノ語ヲ以テ云ヘバ天皇ハ御本人ニシテ裁判所ハ其ノ委任ヲ受ケタル代人ノ如シ是レ裁判所ノ司法事務ニ於

ケル關係ガ他ノ議會ヤ政府ガ立法行政ニ於ケル關係ト異ナル所以ニシテ彼等ハ天皇ノ直接統治ノ機關ニシテ委託ノ關係ナキナリ、

法律ニ依リ之ヲ行フトアルガ故ニ裁判所ノ司法事務ヲ行フハ必ズ法律ニ依ルベキモノニシテ法律ノ外何物ニモ服従スルノ義務ナキヤ明ナリ去レバ如何ナル上官ノ命令ト雖モ裁判所ノ司法事務ヲ左右スルコトヲ得ザルナリ此ノ點亦他ノ行政官府等ト趣ヲ異ニスル所ナリ、

裁判所之ヲ行フトアルガ故ニ司法權ヲ行フモノハ必ズ裁判所ナラザルベカラズ民法上委任ノ法理ヨリスレバ本人ハ一旦代理人ヲ定メテ或ル事務ヲ委任シタルモ本人ノ都合ニヨリ之ヲ解除シテ自ラ之ヲ行ヒ又ハ他人ヲシテ代ハラシムルコトヲ得ルモ公法上ハ之ヲ許サズ苟モ今ノ憲法ノ存スル以上ハ天皇自ラ司法權ヲ實行スルコトヲ得ズ又他ノ機關ヲシテ代テ之ヲ行ハシムルコトモ許サ、ルナリ、

二、司法權、汎ク司法權ト云フトキハ司法行政權ト裁判權トヲ含蓄ス狹義ニ司法權ト云フハ裁判權ノミヲ指ス、

司法行政權トハ裁判權ヲ行フニ必要ナル附隨ノ事務ニシテ即チ裁判所ノ廳舎ノ建設器具機械ノ調査裁判所吏員ノ任免進退并ニ職員ガ正當ニ職務ヲ盡スヤ否ヤノ監督及ビ裁判所ニ要スル費用ノ監督權ノ如キヲ總稱セルモノナリ普通ノ司法行政監督長官ハ司法大臣ニシテ海軍ノ司法行政監督長官ハ海軍大臣ナリ、

裁判權即チ狹義ノ司法權トハ法則ヲ或ル特別ナル事件ニ適用スルノ義ニシテ換言スレバ當事者間ニ蟠マル所ノ訴訟ヲ審判シテ曲直ヲ分ツノ行爲ナリ夫ノ裁判執行權及ビ記録ノ權ノ如キモ

取モ直サズ此ノ裁判權ヨリ發生スルモノナリ何トナレバ裁判ハ執行スルニ非レバ其ノ目的ヲ達スルコト能ハズ又鄭重ナル審理判決ヲ爲シ其ノ執行ヲ遂ゲントスルニハ必ズ記録ヲ要スレバナリ、

三、裁判所ノ種類、

裁判所ヲ司法裁判所及ビ行政裁判所ノ二種トシ司法裁判所ヲ更ニ分ツテ通常裁判所及ビ特別裁判所トス、

第一、司法裁判所、ハ天皇ノ司法權ヲ行フ官署ニシテ行政裁判所ハ行政官廳ノ違法處分ニ依リ權利ヲ傷害セラレタリトスル訴訟ヲ審判スル一種ノ行政監督官廳ナリ、

第二、通常裁判所、トハ司法裁判所ノ通常ナルモノニシテ裁判構成法ニ於テ其ノ組織權限等ヲ規定セリ即チ通常裁判所トハ第一區裁判所第二地方裁判所第三控訴院第四大審院ト云フ、

特別裁判所トハ司法裁判所ニシテ通常裁判所ニ對シテ特別ナル位置ニ立ツモノナリ即チ海陸軍法會議臺灣總督府法院及ビ領事裁判所等之ナリ通常裁判所以外ニ特別裁判所ヲ設ケタル理由ハ各特別ナル事情アリテ普通一般ノ裁判管轄ニ委スル能ハザル必要アルニ由ルモノト云フヲ得ベシ軍法會議ヲ特ニ設ケタル理由ハ軍隊ハ普通ノ社會トハ全ク獨立シタル別社會ヲナシ常ニ生活ノ狀態ヲ異ニシ特別嚴格ナル規律ト制裁ノ下ニ棲息シ軍機軍略等ノ秘密ニ涉ルベキコトモ多ク又常ニ共同運動ヲ要スルガ故ニ一人二人ノ缺員ガ軍ニ至大ノ影響ヲ及ボスベキヲ以テ其ノ治罪ノ手續ノ如キモ頗ル簡便迅速ヲ尊ブ等特種ノ事情不尠ヲ以テ軍人軍屬等ニ對スル司法裁判ハ之ヲ通常裁判所ニ委セズシテ特ニ軍隊内ニ軍法會議ナル裁判所ヲ設置シタル所以ナリ

第二章 海軍軍法會議ノ沿革、

吾ガ海軍軍法會議ノ沿革ヲ尋スルニ初メ海軍省(東京)内ニ海軍裁判所ヲ東海鎮守府(當時横濱ニ在リ)内ニ海軍裁判所派出所ヲ置キ軍人軍屬ノ犯罪ヲ審判シ來リタルガ如キモ當時ノ事ハ今日ニ至リ書類ノ徴スベキモノナキヲ以テ其ノ創設ノ年月ヲ知ルニ由ナシト雖モ明治十五年二月二十七日海軍省并ニ東海鎮守府ニ各刑事課ヲ置キ其ノ權限ニ屬スル所管軍人軍屬ノ犯罪ヲ審判スルコトトナリ同十七年四月一日海軍省ニ海軍東京軍法會議ヲ東海鎮守府ニ鎮守府軍法會議ヲ設置シ各其ノ權限ニ屬スル重罪輕罪ヲ審判スルコト、ナリ同十七年十二月十五日東海鎮守府ヲ相模國三浦郡横須賀ニ移シ横須賀鎮守府ト改稱シ同時ニ軍法會議モ横須賀鎮守府軍法會議ト稱スルニ至レリ次デ明治二十二年二月十二日改正海軍治罪法ヲ以テ常設トシテ東京軍法會議鎮守府軍法會議ヲ臨時トシテ艦隊軍法會議高等軍法會議合圍地軍法會議ヲ設クルコト、ナリ後明治二十八年二月二十八日法律第五號臨時海軍軍法會議法ヲ以テ既設軍法會議ノ外更ニ戰時事變ニ際シ特設司令長官若クハ司令官ノ下ニ臨時海軍軍法會議ナルモノヲ設置シ得ルコト、ナレリ是レ軍法會議沿革ノ概略ナリトス、

第三章 海軍軍法會議ノ裁判權、

海軍軍法會議ハ刑事訴訟即チ公訴事件ニ付テハ其ノ管轄ニ服スベキ者ノ犯シタル重罪輕罪ノ審問判決及ビ違警罪ノ正式裁判ヲ爲シ民事訴訟ニ付テハ海軍官署并ニ現役軍人本法其ノ他ノ法

合ニ於テ海軍軍人ノ例ニ依ルベキコトヲ規定シタル者ノ損害ニ係ル本案附帶ノ私訴ヲ審判スルモノトス、(海治一)

刑施第二十九條 死刑無期又ハ短期一年以上ノ懲役若クハ禁

錮ニ該ル罪ハ他ノ法律適用ニ付テハ舊刑法ノ重罪ト看做ス、
刑施第三十條 前條ニ該當セザル懲役若クハ禁錮又ハ罰金ニ

該ル罪ハ他ノ法律ノ適用ニ付テハ舊刑法ノ輕罪ト看做ス、

刑施第三十一條 拘留又ハ科料ニ該ル罪ハ他ノ法律ノ適用ニ

付テハ舊刑法ノ違警罪ト看做ス、

刑事訴訟民事訴訟、刑事訴訟ハ國家ノ公權ニ關スル訴訟ニシテ國家ガ原告ノ地位ニ立テテ犯罪ヲ證明シ刑法其ノ他ノ刑罰法ノ適用ヲ求ムルヲ目的トスル事件ニシテ即チ通常裁判所ニテハ檢事軍法會議ニテハ海軍檢察官原告官トシテ訴フルモノナリ民事訴訟トハ私法上ノ權利重モニ財產上ニ關スル訴訟ニシテ民法其ノ他ノ私法ノ適用ヲ求ムル事件ニシテ原被告等ノ一人私人ナリ、

公訴私訴、公訴トハ刑事訴訟ノ別名ニシテ矢張り犯罪ヲ證明シ刑罰ヲ適用スルヲ目的トスル訴訟ナリ治罪法上唯私訴ニ對シテ公訴ト稱スルニ過ギズ然レドモ私訴ナル語ハ全然民事訴訟法ノ別名ト見ル能ハズシテ民事訴訟中單ニ犯罪ヲ原因トシテ其ノ犯罪ニ對スル公訴ノ繫屬中之ニ附帶シテ損害ノ賠償若クハ贓物ノ返還ヲ求ムル訴ノミヲ稱ス併シナガラ私訴ノ事實ハ其ノ性質純然タル民事々件ナルガ故ニ獨立シテ純然タル民事裁判所ニ訴フルヲ當然トス其ノ刑事裁判所軍法會議ヘ訴フルコトヲ得セシメタルハ其ノ刑事々件ト原因ヲ同フスルガ爲メニ審判上種々ノ便宜アリトノ理由ヲ以テ本案ノ繫屬中ニ限リ例外トシテ之ニ附帶シテ訴フルコトヲ許シタルモノナリ特ニ軍法會議ニ於テ私訴

ヲ起スハ海軍官署又ハ現役軍人及ビ之ニ准スヘキ者ノ損害ニ係ル場合ニ制限シタルハ必竟成ルベク煩雜ヲ避ケントスルニ在リ、民事裁判所ニ訴フルトキハ總テ民事訴訟法ニ依ラザルベカラズ然レドモ軍法會議ニ訴フルトキハ公訴ノ影響ヲ受ケ其ノ結果ニ於テ大イニ差異アリ、

第一、裁判管轄、

一、土地ノ管轄、民事訴訟法ニ依ルトキハ不正ノ損害ニ付テハ被告人ノ住所地若クハ不正ノ行爲アリタル地ヲ管轄地トスレドモ海軍治罪法臨時海軍軍法會議法等ニ依レバ通則トシテ被告人ノ身分ノ屬スル鎮守府艦隊合圍地根據地占領地等ニ在ル軍法會議ヲ以テ刑事管轄トナスガ故ニ私訴トシテ軍法會議ニ訴フルトキハ民事裁判所ニ訴フルトキトハ土地ノ管轄ヲ異ニスル場合多シ、

二、事物ノ管轄、民事訴訟法ニ依ルトキハ全額ノ多寡ニ依リ區裁判所ニ屬スルト地方裁判所ニ屬スルトアレドモ軍法會議ニ訴フルハ斯ル制限ナシ、

三、裁判所ノ階級、通常民事裁判所ニテハ第一審第二審控訴第三審上告ノ三階級ノ審判ヲ受クルヲ得レドモ軍法會議ハ否ラズ一審即チ終審ナリ、

第二、時効、通常民事訴訟ノ時効所謂出訴期間ハ民法ニ依リ定マルモ私訴ノ時効ハ公訴ト其ノ運命ヲ同フス即チ

一、死刑ニ該ル罪ニ關スル私訴ハ十五年、

二、無期又ハ長期十年以上ノ懲役若クハ禁錮ニ該ル罪ニ關スル私訴ハ十年、

三、長期十年未滿ノ私訴ハ七年、

四、長期五年未滿ノ私訴ハ三年、

五、刑法第八十五條ノ罪ニ關スル私訴ハ一年、

六、拘留又ハ科料ニ該ル罪ニ關スル私訴ハ六ヶ月、

ヲ經テ時効ニ罹ルモノトス、

第三、訴狀ノ形式、民事裁判所ニ訴フルトキハ民事訴訟法ニ依リ一定ノ訴狀ヲ要ス特ニ地方裁判所ノ第一審ニ屬スル事件ニ付キテハ判決ヲ受クヘキ事項ハ必ズ書面ニテ申立テサレベカラス否ラザレバ起訴ノ効ナキモノト看做サル（民訴二二二）然レドモ私訴ノ請求ハ必スシモ一定ノ形式ヲ要セス時ニ書面ニ依ラス口頭ヲ以テモ申立ツルコトヲ得ヘシ、（刑法施行法第六十條參照）

第五、印紙ノ貼用、

民事訴訟トシテ民事裁判所ニ訴フルニハ印紙法ノ定ムル所ニ依リ相當印紙ヲ貼用セサルヘカラス然レドモ私訴トシテ刑事ニ附帶セシムルトキハ印紙ヲ貼用スルニ及ハズ（刑法施行法第六十條參照）

第六、訴訟消滅ノ原因、

治罪法第六條（刑訴第七條）ニ據レバ私訴消滅ノ原因ヲ一、拋棄又ハ和解 二、確定裁判 三、時効トセリ民事訴訟法此ノ以外ニ認諾ヲ以テ拋棄和解ト同シク訴訟消滅ノ一原因トセルモ軍法會議ハ認諾ヲ以テ直チニ消滅原因ト認ムルヲ得ズ、

以上ハ私訴ニ特別ナル影響ナレドモ其ノ他ハ總テ一般ノ民事訴訟ノ手續ト敢テ異ナルヘキモノニ非ズ、

第一節 公訴、

七、公訴權ノ發生、

公訴ハ前述セル如ク犯罪ヲ證明シ刑ヲ適用センコトヲ求ムル訴訟ナルガ故ニ公訴權ノ發生ハ犯罪ニ原因スルヤ論ヲ俟タズ然レドモ犯罪發覺ノ模様ニ種々アルガ故ニ實際檢察官ガ公訴ヲ提起スルニ至ル基因ハ左ノ數種ニ分ル、

第一、告訴、告發、

告訴、告發ハ加害者ヲ罰センガ爲メニ犯罪タル事實ヲ相當官署ニ申告スルモノニシテ二者其ノ性質ニ於テ異ナルコトナシ唯其ノ被害者ヨリスルモノヲ告訴ト名ケ第三者ヨリスルモノヲ告發ト稱スルモノニ過キズ、

第二、自首、

自首トハ罪ヲ犯シタル者ガ未タ發覺セサル前ニ自ラ官ニ首出シテ犯罪事實ヲ申告スルヲ云フ(刑四二)前ノ告訴告發ト異ナルハ犯人自ラ申告スルノ點ニ在ルノミ其ノ公訴權ノ發動ヲ催カス點ニ於テハ其ノ性質孰レモ異ルコトナシ、

(刑四二)罪ヲ犯シ未タ官ノ發覺セサル前自首シタル者ハ其ノ刑ヲ減輕スルコトヲ得、
告訴ヲ待テ論ズヘキ罪ニ付告訴權ヲ有スル者ニ首服シタル者亦同シ、

第三、現行犯、

現行犯トハ現ニ行ヒ又ハ現ニ行ヒ終リタル際ニ發覺シタル犯罪ヲ云フ(刑訴五六)現ニ行ヒツ、アル場合ハ毫モ疑ヒナケレドモ現ニ行ヒ終リタル際トハ果シテ如何ナル程度迄ヲ稱スルヤハ實際ニ於テ往々困難ヲ生ズル問題ナリ例ヘバ殺人罪ニ

於テ加害者ガ被害者ニ留メヲ刺シテ其ノ血刀ヲ提ゲテ尙ホ其ノ死體ノ附近ニ在ル場合ノ如キハ明カニ行ヒ終リタル際ト云フニ適當スレドモ若シ逃走シテ既ニ遠距離ニ至リタル時ハ如何一兩日ノ後發覺シタル場合ハ如何等ノ問題ヲ生スヘシ然レトモ要スルニ既ニ行ヒ終リタル際トハ犯罪ノ痕跡尙ホ顯著ニシテ犯人ト犯罪事實トノ間ニ密接ナル連絡アルコトヲ必要トス、

次ノ場合ハ治罪法上准現行犯トシテ現行犯ニ准スヘキモノトス、

- 一、犯人トシテ一人又ハ數人ニ追呼セラル、トキ、
- 二、兇器贓物其ノ他ノ物件ヲ携帯シ又ハ身體被服ニ顯著ナル犯罪ノ痕跡アリテ犯人ト思料スヘキトキ、
- 三、家宅内ニ於テ犯シタル罪ヲ檢證スル爲メ又ハ其ノ犯人ト思料スヘキ者ヲ逮捕スル爲メ戸主ヨリ官吏ニ其ノ處分ヲ求メタルトキ、(刑訴五七)

第四、新聞ノ記事又ハ風評其ノ他ノ原因ニ依リ犯罪アルコトヲ認知思料シタルトキ、

英國法ニテハ通常公訴ハ告訴告發ニノミ起因シ職權ヲ以テ公訴ヲ提起スルコトナキモ吾邦ノ治罪法ハ此ノ點ニ關シテハ歐洲大陸ノ治罪法ト同シク犯罪アレハ必ス之ヲ罰センコトヲ欲スルガ故ニ檢察官并ニ之ガ補助官ハ職務上犯罪アリヤ否ヤヲ搜索シ毫末モ遺漏ナカラシムコトヲ期スルガ故ニ流言新聞ノ記事ノ如キニ至ル迄苟モ犯罪思料ノ徵憑トナルモノハ公訴提起ノ基因タルヘキモノトス、

参照、

一、佛國ノ檢事制度、

檢事ハ起訴ノ唯一ノ機關ニシテ且ツ裁判ヲ監督シ又裁判ノ執行ヲ監督シ又司法警察官ノ長官ニシテ之ヲ指揮シテ犯罪ヲ搜索スル權アリ佛國ニテハ檢事ヲ法律ノ目又ハ番人ト稱シ居レリ、

二、獨逸ニテハ檢事制度ヲ佛國ヨリ輸入シ起訴及ビ裁判執行ノ權ハ全ク之ヲ檢事ニ委ネタルモ裁判監督ノ事ハ之ヲ禁シ刑事訴訟ニ於ケル原告官ト認メタリ、

三、英國ニテハ蘇格蘭ノ外檢事ノ制度ナシ又英國ニテハ Attorney general (檢事長ノ義) ナルモノアリテ國事犯等僅々ノ犯罪ニ付起訴權ヲ有スレドモ通常犯罪ニ關シテハ起訴ノ官吏ナシ起訴ヲ一私人ニ委ネ一私人ノ告訴告發ナケレバ之ヲ罰セズトノ主義ヲ取レリ、

四、吾法制ハ獨佛等ノ如ク犯罪アレバ之ヲ搜索シ之ヲ處罰スルコトヲ以テ國家ノ權利トシ義務トスルヲ以テ起訴ノ權ヲ一私人ニ委ヌルコトナシ(但シ親告罪ハ例外ナリ)即チ犯罪アレバ義務トシテ搜索シ之ニ對シテ起訴スルノ官吏ヲ必要トス其ノ官吏ハ即チ檢事(檢察官)ナリ併シ吾邦ノ檢事ハ佛國ノ如ク法律ノ番人ニアラスシテ獨逸ノ如ク刑事原告官ト認ムベキナリ、

現行犯ナルトキハ治罪法上種々特別ナル處分ヲ許スモノトス例ヘバ(一)何人ニ限ラス重罪又ハ禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキ輕罪ノ現行犯アリタルトキハ之ヲ逮捕スルコトヲ得(海治四四)(二)又海軍檢察官憲兵ノ將校下士卒又ハ司法警察官巡查ハ軍人ノ現行犯アリタルトキハ令狀ヲ俟タズ直チニ之ヲ逮捕

スルコトヲ得(海治四三)(三)又憲兵卒巡查現行犯ノ軍人ヲ逮捕シ若クハ其ノ交附ヲ受ケタルトキハ之ヲ海軍檢察官等ニ引致スルコトヲ得(海治四五)(四)又海軍檢察官現行犯ノ軍人ヲ逮捕シ又ハ其ノ交附ヲ受ケタルトキハ審問主理ト同シク訊問及ビ檢證處分ヲ爲スコトヲ得又(五)其ノ逮捕若クハ檢證處分ニハ公力ヲ用ユルコトヲ得各廳長艦船管長モ軍人ノ現行犯ニ對シ檢察官ト同様ノ處分ヲナスコトヲ得(海治四六、四七)(六)又憲兵ノ將校下士又ハ司法警察官ハ現行犯ノ軍人ニ對シテ假リニ訊問及ビ檢證處分ヲ爲スコトヲ得(海治四九)等之ナリ而シテ此等ノ處分ハ現行犯ニ限ルモノニシテ非現行犯ニ對シテハ爲スコトヲ得サルモノナリ、

八、公訴權ノ獨立并ニ其ノ例外、

以上述フルガ如ク公訴權ハ國家刑罰權ヨリ生ズル公權ニシテ苟クモ犯罪アレバ直チニ公訴ヲ提出シテ裁判所ヲシテ刑罰ヲ適用セシムルコトヲ得ルモノニシテ一私人ノ私訴ト相俟ツモノニアラズ而シテ檢察官ガ公訴ヲ起スハ必ズシモ被害者ノ告訴ニ基クヲ要セサルナリ是レ犯罪アレバ國家ハ之ガ爲メニ一定ノ害ヲ蒙ルガ故ニ直チニ公訴權發動スルモノニシテ被害者ノ告訴ノ有無ニ拘ハラサルナリ一タビ發生シタル公訴權ハ告訴私訴ノ拋棄ニ由テ消滅スルモノニ非ス之ヲ稱シテ公訴權ノ獨立ト云フ、

夫レ如此公訴權ハ獨立ニシテ被害者ノ告訴ヲ要セサルヲ原則トスレドモ其ノ例外トシテ法律ガ特ニ被害者ノ告訴ヲ俟ツテ初メテ公訴ヲ提起スヘシトナシタル場合アリ學者這般ノ犯罪ヲ名ケテ親告罪ト稱セリ、

告訴ヲ俟テテ公訴ヲ提起スヘキ重ナル場合并ニ其ノ親告罪ト

ナシタル理由次ノ如シ、

(一) 刑法第七十六條乃至第七十九條及第八十三條ノ罪、

此等ノ犯罪モ敢テ國家ニ害ヲ與ヘタルハ他ノ犯罪ト一様ナレドモ而カモ被害者ノ名譽ニ關スル犯罪ナルガ故ニ國家ハ自己ノ蒙リタル害ト公訴ノ爲メ世間ニ發表セラレ爲メニ被害者ノ名譽ヲ損シ一家ノ平和ヲ害スル點トヲ比較シテ後者ヲ重シトシ法律ハ被害者若クハ其ノ親屬ノ告訴アルニ非レバ公訴ヲ提起スルヲ得スト規定シテ其ノ發表ト否トヲ被害者ノ判斷ニ一任セリ、

(二) 幼者ヲ略聚誘拐スル罪、(但シ例外アリ)(刑二二九參照)

是レ亦被害者ノ名譽ニ關スルモノナルガ故ニ親告罪トセリ然レトモ被害者加害者ト婚姻ヲ爲シタルトキハ告訴ノ効ナシ(刑三四四)故ニ結婚アリタルトキハ檢察官ハ起訴スルコトヲ得ズ又起訴後ナルトキハ起訴ノ効ヲ失フ但シ其ノ婚姻無効ノ訴アリタルトキハ訴訟ハ中止スヘキモノトス、

(三) 名譽ニ對スル罪、(刑二三二)

親告罪トシタル理由ハ前ト同シク被害者ノ名譽ヲ慮カリタルニ由ル、

(四) 直系血族、配偶者及同居ノ親族又ハ家族以外ノ親族又ハ家族ノ竊盜、詐欺恐喝、橫領罪、(刑二四四ノ一後段二五一、二五五條)

理由ハ前ト同シク被害者ノ名譽ヲ慮カリタルニ由ル、

(五) 權利義務ニ關スル文書毀棄罪、建造物艦船以外ノ物ノ損壞又ハ傷害罪、信書隱匿罪、(刑二六四)

理由ハ輕微ノ財産犯ナルガ故ニ被害者ノ裁量ニ一任スルヲ可トシタルニ由ル、

以上ハ普通刑法ノ親告罪ナルガ特別法ニモ親告罪ノ規定アリ、

(六) 狩獵規則違犯、(狩獵法第五條)

土地ノ所有者及ビ占有者ガ他人ノ狩獵行爲ニヨリテ侵害セラレタルトキハ前號ノ場合ト同シク公益ヨリモ私益上ノ損害重キガ故ニ告訴ヲ俟テ起訴スルコトトセリ、

(七) 特許權、商標權、意匠權、著作權侵害ノ罪、(特許法四八條商標法一九條、意匠法二〇條著作權法四四條)

理由ハ前號ニ同シ、

(八) 議會ニ對スル誹毀及侮辱罪、

此等ノ罪ノ被害者ハ議會其ノ物ニシテ議員其ノ人ニアラズ議會自ラ誹毀侮辱ヲ受ケタリト感ズルニ非レバ此ノ行爲ニ對シテ刑罰權ヲ行フコトヲ得ズ、(明治二十二年法律第二十八號議員保護法第一條)故ニ議會ノ告訴ナケレバ起訴スルヲ得ズ、

法律上親告罪トナルモノ大略以上ノ如シ然レトモ必スシモ以上ニ限ルニアラズ特別法ヲ以テ告訴ヲ要ストスルトキハ則チ親告罪タリ去レトモ法律ニ明文アルモノ、外ニハ毫モ親告罪ナルモノアルコトナシ尙親告罪ニ似テ非ナルモノアリ明治二十三年間接國稅犯則者處分法ニ依レバ犯則者アルトキハ收稅官ヨリ管轄裁判所ニ告發スルモノニシテ此ノ告發ナケレバ起訴スルヲ得ズ告發ハ即チ起訴ノ條件ナリ、(大判例)

親告罪ニ於ケル告訴ハ公訴權實行ノ條件ニシテ之レナケレバ公訴ヲ實行スルヲ得サルモ犯罪ハ既ニ成立セルガ故ニ告訴ハ犯罪成立要素ニアラズ然レトモ我刑事訴訟法ハ告訴ノ拋棄ヲ以テ

公訴消滅ノ原因トナスカ故ニ一旦告訴アリテ起訴シタル事件ト雖モ告訴人ニ於テ告訴ヲ取下ケタルトキハ最早公訴ヲ實行スルヲ得サルナリ、

九、公訴權ノ消滅、

公訴權ハ前ニ陳ヘタルガ如ク獨立ニシテ告訴私訴ノ拋棄アルモ消滅スルモノニ非ズ然レトモ刑罰モ固ト是レ治國ノ要具ニ過キサルガ故ニ或ル原因ノ爲メ之ヲ實行スルノ必要ナキニ至レバ公訴權モ亦消滅ニ歸スヘキ場合アリ刑事訴訟法第六條ニ公訴ヲ爲ス權ハ次ノ事項ニ因テ消滅スト規定シテ其ノ消滅原因ヲ列舉セリ若モ其ノ消滅原因生ズルトキハ起訴以前ナレバ訴訟ヲ提起スルヲ得ズ起訴後ナルトキハ其ノ公訴續行ノ權消滅ス今刑訴第六條規定ノ公訴消滅原因ハ次ノ如シ、

第一、被告人ノ死去、

被告人ハ公訴ノ目的物ナリ目的物タル被告人ニシテ死去セバ刑罰ヲ適用スベキ目的消滅スルガ故ニ之ヲ以テ公訴權消滅ノ原因ト爲スハ當然ナリ故ニ起訴前被告人死亡スレバ起訴ヲ爲スヲ得ズ又訴訟中死亡スレバ訴訟ヲ續行スルヲ得ズ、

第二、告訴ヲ待テ受理スベキ事件ニ就テ告訴ノ拋棄、

告訴ヲ待テ受理スベキ事件トハ前ニ述ヘタル所ノ強迫誹毀姦姪略取誘拐等ノ罪ニシテ所謂親告罪之ナリ此等ノ犯罪ハ公訴獨立ノ例外ニシテ告訴ヲ以テ起訴ノ條件トナス告訴ハ被害者又ハ親族ノ權利ニ屬スルガ故ニ之ヲ爲スト爲サ、ルハ其ノ自由ナルノミナラズ一旦告訴シテ公訴起リタル後ト雖モ拋棄スルコトヲ得而シテ告訴ニシテ拋棄サレタルトキハ公訴權ハ直チニ消滅スルガ故ニ起訴前ナレバ檢察官ハ起訴スルヲ得ズ起訴後ナレバ裁

判官免訴ノ言渡ヲ爲サ、ルヘカラズ其ノ理由ハ前已ニ述ヘタルヲ以テ略ス、

第三、確定判決、

公訴權ハ正當ニ使用セラレテ消滅スルコトアリ其ノ使用セラレスシテ消滅スルコトアリ後者ハ時効ト云ヒ前者ヲ確定判決ト名ツク時効ノ事ハ後ニ説明スヘシ、

公訴權ノ正當ニ使用セラル、トハ犯罪事件ニ付原告官ヨリ刑ノ適用ヲ請求シ裁判所ガ之ニ對シテ判決ヲ與ヘ其ノ判決確定シタルヲ云フ判決ノ確定トハ判決ガ攻撃スヘカラザルニ至リ且執行力ヲ生シタルモノヲ云フ通常裁判所ノ判決ハ上訴期間ノ經過シ又ハ審級ノ盡キタル場合ニ確定シ軍法會議ノ判決ハ上訴ヲ許サ、ルガ故ニ宣告ト同時ニ確定ス判決一タビ確定シタルトキハ罪ノ有無ヲ問ハズ既ニ公訴ハ正當ニ使用セラレタルモノナルガ故ニ同事件ニ對シ再ビ公訴ヲ起スヲ得ズ之ヲ稱シテ一事不再理ノ原則ト云ヒ又事件自體ヨリ稱シテ既判力ト云フ若シ否ラズシテ同一事件ニ付幾回トナク公訴ヲ提起シ得ルトスルトキハ判決ハ遂ニ確定スルノ期ナクシテ裁判ノ威信ハ毫モ保ツコトヲ得サルノミナラズ國民ハ一日モ安ンスルコト能ハサルナリ是ヲ以テ公訴權一タビ正當ニ使用セラレタル以上ハ判決茲ニ確定シ公訴權ハ從テ消滅スルモノトセリ故ニ前ニ確定判決ヲ受ケタル事件ナルコトヲ知ラズシテ起訴シタル場合ニ於テハ裁判所ハ免訴ノ言渡ヲ爲サ、ルヘカラズ、

判決ノ確定シテ既判力ヲ生スル部分ハ判決主文即チ被告等ヲ何罪ニ因テ何々ノ刑ニ處ス等ノ文言并ニ其ノ主文ヲ生シタル理由ナリ主文ノ確定スルハ勿論ナルモ刑事判決ノ理由中ニハ犯罪

事實ヲ包含スルモノニシテ其ノ犯罪事實アリテ初メテ主文ヲ生ジ主文ト離ルヘカラサル關係ヲ有スルガ故ニ其ノ理由タル事實モ主文ト共ニ確定ス又無罪ノ場合モ同様ナリ例ヘバ竊盜ナリトノ公訴ヲ受ケ審理ノ末竊盜ニアラズ贈與ヲ受ケタルモノナリトノ理由ニ因リ無罪(主文)ノ判決アリタルトキハ既判力ヲ生ジ一事不再理ノ原則ノ爲メニ更ニ起訴スルコトヲ得サルガ如シ、
第四、犯罪後其ノ刑ノ廢止、

起訴前ト起訴後トニ區別ナク刑ノ廢止アリタルトキハ其ノ刑ヲ適用スルノ必要ナキガ故ニ公訴權消滅ス然レトモ廢止ト改正トハ之ヲ區別スルコトヲ要ス廢止ハ刑ノ法律上ヨリ全ク除去セラレタルノ謂ニシテ法律ヲ改正シ刑罰ヲ輕重シタルニ止マルトキハ國家ハ尙其ノ刑ヲ當行スルノ必要アルモノトセルモノナルガ故ニ公訴權ノ消滅アルコトナシ一方ヨリ見レバ改正セラレタル部分ハ其ノ實廢止ナルヲ以テ廢止ノ法律ニ付テハ公訴消滅シ改正法ニ付テハ公訴權發生スト云フヲ得ヘキガ如シト雖モ改正ハ刑ヲ法律上除去スルモノニアラスシテ之ヲ變更スルモノナレバ廢止ト云フヲ得ズ又犯罪後刑ヲ廢止シ更ニ同一刑ヲ制定シタルトキハ犯罪當時ノ刑ハ廢止セラレタルヲ以テ新設後起訴スルヲ得ズ、

第五、大赦、

大赦ヲ爲スノ權ハ一ニ天皇ノ大權ニ屬スルコト憲法第十六條ニ規定スル所ナリ、

大赦ノ制度ハ吾邦及ビ支那ニ於テ古來君主ノ德政トシテ行ハル、所ニシテ多クハ即位又ハ大葬等大典ノ際行ハル史上往々例ヘバ詔赦天下又ハ大赦天下等ノ文字アリテ大赦アレバ必ラズ史

冊ニ特筆大書スルヲ例トセリ泰西ニテモ希臘羅馬等大赦(Amenisti)ノ例アリ、

大赦ハ起訴權并ニ裁判執行權ノ全部ヲ消滅セシムル効力アルモノニシテ一タビ大赦ニ接スル時ハ曾テ犯罪ナカリシモノト看做ス制度ナリ故ニ起訴前ニ在リテハ公訴提起スルヲ得ズ起訴後ニ在リテハ訴訟手續ヲ續行スルヲ得ズ判決後ニ在リテハ其刑ヲ執行スルヲ得ズ直チニ放免スヘキナリ其詳細ナル効力ニ至ツテハ刑法若クハ憲法ニ於テ研究スヘキ問題ナルガ故ニ之ヲ略ス治罪法上ニテハ公訴權消滅ノ一原因タル事ヲ記憶スレバ足レリ、
第六、時効、

公訴權ハ一定ノ期間使用セズシテ經過スルニ因リテ消滅ス之ヲ時効ニ因ル公訴權ノ消滅ト云フ、

時効ノ制度ヲ設ケタル立法ノ趣旨ニハ數種アリ之ヲ説明スルニ先チ注意スヘキハ刑事ノ時効ニハ刑ノ時効ト公訴ノ時効トアルコトヲ知ルヲ要ス刑ノ時効ハ既ニ確定判決ヲ受ケタル刑ノ消滅原因ニシテ公訴ノ時効ハ起訴權ノ消滅原因ナリ如此二者其ノ目的ヲ異ニスルモ其ノ基本ハ即チ一ナリ公訴權ヲ消滅シ刑ヲ消滅セシムルハ皆國家ガ刑ノ適用ヲ必要トセサルニ起因ス又民事上ノ時効ニハ消滅ト取得トノ二種ノ効力アルモ刑事ノ時効ニハ取得ナク唯消滅アルノミ是レ民事上ニ於テハ或ル期間内或物ニ對シテ權利者ノ如キ行爲ヲ行ヒタルガ爲メニ其ノ物上ニ權利ヲ取得セシムルハ社會公益上必要ナルベケレドモ刑事上如何ナル年月ヲ經過スルモ犯罪ナクシテ刑罰權ヲ生スルコトナケレハナリ而シテ公訴時効ハ犯罪ノ時ヨリ又刑ノ時効ハ刑ノ確定シタル時ヨリ一定ノ期間經過ノ後完成スルモノナリ、

時効ノ制度ハ果シテ正當ナリヤ否ヤニ付キテハ古來ノ學者ハ概ネ之ヲ批難シ我邦ニ於テハ時効ヲ認許シタル例ナキガ如シ刑法治罪法制定ノ際ニモ大イニ議論アリシガ今日開明國ノ法制ニ於テ概ネ之ヲ採用セサルナシ然レトモ其ノ之ヲ採用スル趣旨ニ至リテハ區々一定セズ、

第一説、犯人ノ悔悟ヲ基本トスル説、罪ヲ犯シ歲月ヲ經過スル間ニハ犯人ハ從來ノ惡行ニ付悔悟ノ念ヲ起シ其ノ間無形ノ苦痛ヲ感スルコト亦頗ル大ナリ以テ犯人ヲシテ刑ノ適用ヲ免脱セシムルニ足レリト是レノ相像説ニシテ採ルニ足ラズ何トナレハ實際歲月ノ久シキニ涉ルモ悔悟セサルモノ多ケレハナリ、

第二説、證據湮滅説、歲月ノ經過スルニ從ヒ有罪無罪ノ證據共ニ湮滅ス之ニ對シテ刑ヲ適用スルハ危險是ヨリ甚シキハナシ故ニ時効ナル制度起レリト然レトモ此ノ説ハ第一ニ刑ノ時効ニ適合セズ又公訴時効ニ付テモ事實ニ適セサル場合多シ何トナレバ歲月經過スレハトテ必スシモ證據ノ湮滅ヲ來サズ短期ノ時効ニ係ル罪ニ付テ調書等ノ存スルニ於テハ犯人ヲシテ訴追ヲ免カレシムルノ理由トナラズ、

第三説、社會遺忘説、此ノ説ノ理由トスル所ハ諺ニ人ノ噂モ七十五日ト云フガ如ク犯罪後時日ヲ經過スルニ從ヒ人ノ記憶モ漸次消散シテ社會ハ犯罪ヲ遺忘スルニ至ル然ルニ之ヲ罰スルハ却テ平地ニ風波ヲ起スモノニシテ社會ニ害アルモ益ナキガ故ニ國家ハ時効ノ制度ヲ設ケテ犯罪ノ大小輕重ニ從ヒ遺忘ノ時期ヲ推測量定シ未タ判決ヲ經サル犯罪ニ在テハ公訴權ヲ消滅セシメテ犯人ヲシテ犯罪ノ効果ヲ免カレシメ既ニ判決ヲ經タルモノニ在リテハ刑罰執行權ヲ消滅セシメテ犯人ヲシテ處罰ヲ免カレシ

メタリ而シテ其ノ遺忘ハ法律上ノ推測ニシテ他ノ民事上ノ推測ト同シク世間ノ多例ニ基キ設ケタルモノナリトスルニ在リ其ノ他時効ノ基本ニ關シテハ種々ノ學說ナキニ非サルモ余ハ此ノ説ヲ以テ吾現行法ノ精神ニ適スルモノト信ズ、

公訴ノ時効ハ次ノ期間ヲ經過スルニ因テ成就ス、(海治第六條刑訴第八條)

- 一、死刑ニ該ル罪ニ付テハ十五年、
- 二、無期又ハ長期十年以上ノ懲役又ハ禁錮ニ該ル罪ニ付テハ十年、
- 三、長期十年未滿ノ懲役又ハ禁錮ニ該ル罪ニ付テハ七年、
- 四、長期五年未滿ノ懲役若クハ禁錮又ハ罰金ニ該ル罪ニ付テハ三年、
- 五、刑法第八十五條ノ罪ニ付テハ一年、
- 六、拘留又ハ科料ニ該ル罪ニ付テハ六月、

以上ノ如ク時効期間ハ罪ノ輕重ニ依リ區別シタルモノニシテ刑ノ輕重ニ依ルモノニ非ズ是レ蓋シ前ニ述ヘタル如ク重大ナル罪ハ社會ノ遺忘スルコト遅ク輕小ナルモノハ速カニ遺忘スルトノ推測ニ基クモノナリ、

刑訴第十條ニ公訴私訴ノ時効ハ犯罪ノ日ヨリ其ノ期間ヲ起算ス但シ繼續犯ニ付テハ其ノ最終ノ日ヨリ起算ストアルガ故ニ時効ハ犯罪ノ日ヨリ起算セザルベカラズ普通民事上ニ於ケル期間計算法ニヨレバ初日ヲ算入セズ又最終ノ日モ休日ナルトキハ之ヲ算入セサル例ナルニ時効期間ニ付テハ之ヲ算入セサルヘカラス是レ此ノ期間ノ經過ハ裁判所ノ行爲ト毫モ關係ナケレバナリ犯罪ノ日トハ何レノ日ヲ指スヤ之ヲ定ムルコト往々困難ナル場

合アリ例ヘバ甲者乙ノ水練術ヲ知ラサルヲ察シ之レヲ溺死セシメ
メシコトヲ謀リ誘フテ深淵ニ陥レ其ノ救助ニ應ゼズシテ遂ニ其
ノ翌日溺死セシメタリトセヨ犯罪ノ日ハ果シテ何レナリヤ又例
ヘバ甲者過テ前夜火燭ヲ倉庫中ニ放置シタルガ爲メ遂ニ翌日火
災ヲ起シタリトスルトキハ何レノ日ヲ以テ犯罪ノ日トナスヘキ
ヤノ問題ヲ生セン然レトモ犯罪ノ日トハ犯罪成立ノ日ヲ云フガ
故ニ前例ニ於テ乙ノ溺死シタル日後例ニ於テハ倉庫ノ燒失シタル
日ヲ以テ起算點トセサルベカラズ何トナレバ殺人罪ハ死ニ至
ラシメテ初メテ成立シ失火罪ハ燒失シテ初メテ成立スルモノナ
レバナリ、

又法文但書ニ繼續犯ニ就テハ其ノ最終ノ日ヨリ起算ストアリ
テ一見通常犯罪ノ例外ノ如クナレドモ決シテ例外ニアラズ通常
ノ犯罪ト雖ドモ犯罪ノ成立シ了リタル日ヨリ起算スルニ外ナラ
ズ其ノ殊ニ但書ヲ設ケタルハ繼續犯ノ如キハ其ノ成立ニ比較的
長キ時日ヲ要スルヲ以テ之レヲ説明注意シタルニ過ギズ繼續犯
トハ例ヘバ不法監禁ノ如キ數多ノ日月間繼續シテ或場所ニ監禁
シ置クトスルトキハ其ノ間毎日犯罪ノ日ナリ然レトモ其罪ノ半
ヲ時効ニ罹ラシムルコトヲ得サルヲ以テ監禁ノ止ミタル日ヨリ
起算スベキモノトス又例ヘバーニ連續犯ト稱シ行爲ハ繼續セサ
ルモ意思ヲ繼續シテ數多ノ日月ニ跨ガリ數回犯行ヲ繰返スモノ
アリ此等ハ繰返シタル數箇ノ犯罪ヲ連結シテ一罪ト見做ス彼
姦通罪ノ如キ又ハ一倉庫ノ米俵ヲ數回ニ引續キ盜ムガ如キ數
箇ノ行爲ハ一ツツヲ離ストモ各一罪タルニ差支ナキモ意思ガ
繼續シテ唯一ナルガ故ニ一罪トシテ罰スルナリ故ニ其ノ最終ノ
日ヨリ起算スルハ結局犯罪ノ成立シ終リタルトキヨリ起算スル

ニ外ナラスシテ例外ニアラズシテ説明ニ過ギズ、
時効ハ前ニ述べタル起算點ヨリ起算シテ一定ノ年月ヲ經過シ
テ成就スルガ故ニ其ノ期間公訴起ラサルトキハ公訴權茲ニ消滅
シテ犯人ハ最早刑事訴追ヲ免ルベシ乍併時効ハ必スシモ常ニ濫
帶ナク經過スルモノニ非ス場合ニヨリテハ之ヲ中斷セラル、コ
トアルベシニタモ中斷セラル、トキハ中斷以前ニ經過シタル日
數ハ無効ニ歸シ時効期間ニ算入スルヲ得ズシテ中斷手續ヲ行ヒ
タル日ヨリ新タニ其期間ヲ計算ゼサルヘカラス(刑訴一一)而シ
テ其ノ中斷ノ原因ハ刑訴十一條ノ規定スル所ニシテ海軍治罪法
ニモ適用ス即チ起訴、豫審又ハ公判ノ手續何レカ一ヲ爲スニ因
リテ時効ノ經過ハ中斷セラル、モノトス海軍治罪法ニテ云ヘバ
檢察具申、審問、判決ノ手續ニヨリテ中斷セラル、ナリ去リテガ
ラ中斷ハ既ニ經過シタル日子ヲ無効ナラシムルニ止マリ將來ノ
時効ノ進行ヲ妨クルモノニ非ズ故ニ一旦檢察具申、審問、判決ノ
手續ヲナシ中斷シタリト雖モ時効ハ其ノ手續ヲ止メタル日ヨリ
更ラニ進行ヲ初メ法定ノ期間經過スレバ成就スルモノトス、
時効ノ中斷ハ對事件的ノ性質ヲ有シ一人ニ對シ中斷アレバ其
ノ未ダ發覺セサル正犯從犯又ハ民事擔當人ニ對シテモ中斷ノ効
アリトス何トナレバー一人ニ對シテ犯罪遺忘ノ推測ナシトスレバ
其ノ犯罪全體ニ付時効ノ成就スル謂ハレナシ然ラバ其ノ未ダ發
覺セサル共犯又ハ民事ノ責任アル者ニ對シ時効ヲ生ズルノ理由
トナルベシ、

時効ハ公訴權ヲ消滅セシムルガ故ニ起訴前ニ在テハ檢察官公
訴ヲ提起スルヲ得ズ誤テ起訴シタルモノナルトキハ裁判所ハ免
訴ヲ言渡スヘキモノナリ故ニ刑事裁判官ハ本案事實ノ察理ニ入

ルニ先チ時効ニ罹リタルヤ否ヤヲ審査スヘク檢察官モ亦起訴ガ時効以前ニ爲サレタルモノナルコトヲ明ニスルヲ要スルガ故ニ犯罪時日ノ確認ハ甚ダ必要ナルモノトス、

終リニ一言スヘキハ民事ノ時効ニ停止ナルモノアレドモ刑事ニハ之ナシ是レ民事ニテハ權利者無能力等ノ爲メニ或ハ權利ヲ行使スルコト能ハザル時期アルガ故ニ時効ノ停止モ必要ナレドモ公訴權ハ常ニ之ヲ行使スル機關備ハルガ故ニ時効ヲ停止スルノ要ナシトス、

第二節 私訴、

一〇 私訴權ノ發生并行使、

私訴ハ刑事訴訟ニ附帶シテ刑事裁判所(軍法會議)ニ提起スル民事訴訟ニシテ其ノ目的ハ犯罪ニ因リテ被リタル損害ノ賠償贓物ノ返還ヲ求ムルニ在ルコト前既ニ述ヘタルガ如クナルガ故ニ私訴權ノ發生ハ犯罪成立ト同時ナリトス而シテ其ノ權利ハ犯罪ノ被害者ニ屬シ公訴トハ別物ナルヲ以テタトヒ公訴起リタリトテ之ニ附帶シテ私訴ヲ提起スルト否トハ一ニ被害者ノ任意ニ存スルモノナリ其ノ如何ナル場合ニ果シテ損害ノ賠償贓物ノ返還ヲ要求スルコトヲ得ルヤ否ヤノ問題ニ付テハ民法第七百九條以下ノ規定ニ依リ判斷スルヲ要ス例ヘバ竊盜罪ノ場合ニ所有者ガ物件ヲ竊取セラレタルガ故ニ私訴ヲ起スコトヲ得ルヤ又親ガ殺傷セラレタルガ故ニ其ノ子ハ私訴ヲ提起スルコトヲ得ルヤ否ハ民法第七百九條第七百十條第七百十一條等ニ依リ決スヘキ問題ニシテ訴訟法又ハ治罪法上ノ問題ニアラズ又誹毀罪ニ付テハ私訴ヲ提起スルコトヲ得ルヤ否ヤハ議論ナキニ非ザルモ要スルニ

不法行爲ハ損害賠償ヲ求ムコトヲ得ルヤ否ヤニ歸ス之ニ付テハ自己ガ誹毀セラレタル場合ト死者ニ對シテ誹毀アリタル場合トニ區別セザルヘカラズ自己ガ誹毀セラレシ場合ハ民法第七百十條ニヨレバ身體自由名譽ヲ害シタル場合ト財産權ヲ害シタル場合トヲ問ハズ賠償ノ責任スヘキモ死者ニ對スル誹毀ノ場合ニハ學者間ニ異論アレドモ民法ノ研究ニ讓ル、

又私訴ハ本案(公訴)ノ判決アル迄何時ニテモ本案ノ繫屬セル軍法會議ニ提起スルコトヲ得レドモ海軍治罪上ニ於テハ寧ロ私訴ヲ爲サントスル被害者ハ告訴ト同時ニ私訴要求書(宛名ハ軍法會議宛)ヲ檢察官ニ差出スヲ例トセリ(治執第十七)又犯罪ニ基因スル損害賠償贓物返還ノ訴ハ必ズシモ公訴ニ附帶シテ提起セザルヘカラザルモノニ非ズ別ニ民事裁判所ニ民事訴訟トシテ提起スルコトハ決シテ法律ノ禁ズル所ニ非ズ寧ロ本則ナルガ故ニ被害者ノ撰擇ニ任セ或ハ民事裁判所ニ提起シ又ハ軍法會議ニ公訴ニ附帶シテ訴フルコトヲ得ルナリ、

一一、私訴權ノ消滅、

私訴ハ公訴ニ附帶スルガ故ニ其ノ消滅ハ公訴ニ伴ハシムルヲ原則トス然レトモ訴ノ性質相異ナルヲ以テ全然一樣ナルコト能ハズ即チ私訴權ノ消滅原因ハ左ノ如シ、(刑訴七)

第一、拋棄又和解、

私訴權ハ私法上ノ權利ニシテ被害者ニ屬スルヲ以テ之カ消長ハ毫モ公益ニ關スルコトナシ去レバ被害者ニ於テ之ヲ拋棄シ又ハ加害者ト和解談調ヒタルトキハ茲ニ私訴權ヲ消滅セシムルハ當然ニシテ敢テ喋々ヲ要セズ、

第二、確定判決、

確定判決ノ何タルコトハ公訴消滅ノ原因トシテ既ニ述ベタル唯茲ニ所謂確定判決ハ贓物返還損害賠償ノ請求ニ對スル確定判決ナリ而シテ公訴ノ確定判決アリタリトテ私訴ノ消滅スルモノニ非サルコトハ兩者獨立ナル性質ニ照シテ明カナリ公訴ニ付確定判決アルトキハ私訴ノ請求ハ民事裁判所ニ爲スヘキモノナリ若シ私訴ノ確定判決後再び其ノ訴ヲ提起シタルトキハ相手方ハ既判力ノ抗辯ヲ爲スヲ得ヘク裁判所ハ一事不再理ノ原則ニ依リ其ノ訴ヲ却下スルモノトス、

第三、時効、

普通民事訴訟ノ時効ハ民法ニ依リ定マルモ私訴ノ時効ハ公訴ノ時効ト同一ノ期間ニ依リテ共ニ完成ス是レ其ノ理由ハ公訴時効ノ理由ト同一ニシテ公訴權消滅シ既ニ刑罰權ヲ行フコト能ハザル時ニ當リ犯罪ヲ證明シ損害ノ回復ヲ求ムルガ如キハ公訴時効ノ基本タル犯罪ノ遺忘ト相容レサルヲ以テナリ然レトモ公訴ニ付已ニ刑ノ言渡アリタルトキハ民法ニ定メタル時効ノ例ニ從スモノトス(刑訴九ノ二)是レ此ノ場合ニ於テハ公訴ノ時効ニ伴ハシムル必要ナキニ至リタレバナリ換言スレバ刑ノ言渡アリテ確定シタル以上ハ公訴ニ時効ナキヲ以テ私訴ノ爲メ犯罪事實ヲ何時ニテモ之ヲ表明スルモ公益ヲ害セザレバナリ、

其ノ他私訴時効ノ起算點并ニ中斷等總テ公訴時効ニ同シキガ故ニ別ニ説明ヲ要セズ、

第三節 違警罪ノ正式裁判、

明治二十二年十月法律第二十五號海軍軍人軍屬違警罪處分例(第一條)ニヨレバ海軍軍人軍屬ノ犯シタル違警罪ハ憲兵部ニ於テ處分シ憲兵設置ナキ他ニ於テハ警察署ニ於テ其ノ處分ヲ爲スコト、シ而シテ其ノ處分方法ハ明治十八年九月第三十一號布告違警罪即決例ニ依リ即決ヲ爲スモノトセリ即決例ニヨレバ即決ハ裁判ノ正式ヲ用非ズ憲兵部又ハ警察署ニ於テ被告人ノ陳述ヲ聽キ又ハ聽カズシテ證據ヲ取調べ直チニ其ノ言渡ヲナスモノトス(即決例二條)是レ違警罪ノ如キハ輕微ナル犯罪ナルガ故ニ便宜簡略ニ從ヒタルナリ夫レ如此即決ハ便法略式ナルヲ以テ往々裁判ニ誤謬ナキ能ハズ故ニ即決言渡ニ不服ナルモノハ管轄海軍常設軍法會議ニ向テ其ノ事件ニ對シテ正式ノ裁判ヲ請求スルコトヲ得而シテ正式裁判ヲ請求スル者ハ其ノ即決言渡ヲ爲シタル憲兵部又ハ警察署ニ其ノ理由ヲ記載シタル書面ヲ差出スヘキモノニシテ其ノ期限ハ自ラ出頭シテ言渡ヲ受ケタル場合ニハ言渡ヨリ三日內缺席言渡ノトキハ言渡書ノ送達アリタルヨリ五日內トス憲兵部又ハ警察署ガ右ノ請求書ヲ受領シタルトキハ二十四時間内ニ一切ノ訴訟書類ヲ管轄軍法會議ノ長官ニ送致スヘク軍法會議ハ被告人ノ訊問ヲ爲シ又ハ爲サズシテ通常ノ手續ニ從ヒ裁判ヲ爲スモノニシテ是レ即チ正式裁判ナリ、

第四節 海軍軍法會議ノ裁判權ニ復スヘキ者、

場所、時、軍法會議ノ種類等ニ依リ多少制限ヲ受ケ一般ト特別トノ差異アレドモ概シテ海軍ノ裁判權ニ服スヘキモノヲ舉クレ

ハ左ノ如シ、

- 一、現役海軍軍人軍屬及ビ其ノ所屬諸生徒、
 - 二、召集中ノ海軍軍人、
 - 三、俘虜降人、
 - 四、任官就役前罪ヲ犯シタル現役軍人及ビ在官現役中犯罪ノ告訴告發アリタル後免官若クハ現役ヲ去リタル者、
 - 五、共犯附帯犯ノ場合ニ於ケル陸軍軍人但シ先キニ審判ニ着手シタルトキ、
 - 六、敵前軍中臨戰合圍ノ地又ハ海軍用船ニ在テ重罪輕罪ヲ犯シタル常人、
 - 七、海軍用船ノ乗員、
 - 八、從軍常人、
 - 九、戒嚴地ニ於テ海軍刑法ノ罪ヲ犯シタル總テノ人、
 - 一〇、合圍ノ地ニ於テハ戒嚴令ノ定ムル所ニ依リ特別ナル裁判權ヲ有ス即チ合圍地境內ニ於テハ軍事ニ係ル民事及ビ次ニ開列スル犯罪ニ係ル者ハ總テ軍衙ニ於テ裁判ス、
- 刑法第二編第一章皇室ニ對スル罪、第二章國事ニ關スル罪、第三章靜謐ヲ害スル罪、第四章信用ヲ害スル罪、第九章官吏瀆職ノ罪、
- 第三編第一章中謀殺放殺ノ罪、毆打創傷ノ罪、擅ニ人ヲ逮捕監禁スル罪、脅迫ノ罪、第二章中強盜ノ罪、放火失火ノ罪、決水ノ罪、船舶ヲ覆沒スル罪、家屋物品ヲ毀壞シ及ビ動植物ヲ害スル罪、
- 又合圍地境內ニ裁判所ナク又管轄裁判所ト通路斷絶セシ時ハ民事刑事ノ別ナク總テ軍衙ノ裁判ニ服ス、

- 一一、國法ニ明文ナキモ國際法ノ原則慣例ニ依リ間蝶海賊ニ對シ裁判權アリ、
- 一二、其ノ他本法其ノ他ノ法令ニ規定アル場合、

第四章 海軍軍法會議ノ種類及構成、

第一節 種類、

治罪法、ハ軍法會議ノ種類ヲ其ノ存立時期ノ點ヨリ之ヲ常設ト臨時トニ分チ又其ノ審判權限ノ高下ニ依リテ之ヲ普通及ビ高等ニ區別セリ、

東京軍法會議及ビ各鎮守府軍法會議ハ常設ト爲シ艦隊軍法會議ハ臨時各艦隊ニ之ヲ設ケ高等軍法會議ハ臨時東京ニ開設シ合圍地軍法會議ハ臨戰合圍ノ戒嚴間之ヲ設ク其ノ他戰時事變ニ際シ特ニ設ケタル司令長官若クハ司令官ノ下ニ臨時軍法會議ヲ置クコトヲ得而シテ東京ニ臨時開設スル高等軍法會議以外ノ軍法會議ハ總テ普通軍法會議ナリトス、

第二節 構成、

軍法會議、ハ判士長一名判士四名主理若クハ主理試補及ビ錄事ヲ以テ構成ス故ニ或ル例外ヲ除ク外此等ノ一ヲ缺クトキハ構成ノ完全ヲ缺クモノニシテ適法ナル軍法會議成立セサルナリ、

軍隊ニ於テハ身分ノ階級官等ノ順序ヲ重ニスルガ故ニ下級ノ者ヲシテ上級ノ者ヲ裁判セシムルヲ得ズ裁判ノ局ニ當ルヘキ判士長及ビ判士ノ一名ハ必ず被告人ヨリ官階ノ高等ナル者ヲ要シ其ノ他ノ判士モ少ナクトモ同等ナルヘク決シテ被告人ヨリ下等

ナルヲ許サズ去レバ被告人ノ身分異ナル毎ニ判士長判士ノ身分ニモ變更ヲ要スルノミナラズ普通軍法會議ト高等軍法會議トニ依リ構成上判士長判士ノ身分ニ區別ナリ詳細ハ海軍治罪法第十一條ノ構成表ヲ見テ知ルヘシタトヒ軍人ニ非ル者被告人トナルモ其ノ身分ニ依リ軍人ニ准シテ取扱フモノトス、(治十二條)

今軍法會議各構成員ノ職務ノ大要ヲ述フレバ次ノ如シ、

一、判士長判士ハ主理ヨリ判決開庭ノ通知ヲ受ケタル日時ニ軍法會議ヲ開キ豫テ主理ヨリ交附シタル訴訟書類ニ基キ被告人ヲ訊問シ尙ホ必要ナリトスルトキハ證人訊問其ノ他ノ證據調ヲナシ本案刑事事件并ニ附帶私訴事件ニ付判決ヲ爲ス、

二、主理主理試補ハ通常裁判所ノ豫審判事ト檢事ノ職ヲ兼テタルガ故ク被告人ヲ訊問シ犯罪ノ證據ヲ蒐集シ又ハ檢察官ノ蒐集シタル證據書類ニ付本案刑事事件并ニ附帶私訴事件處分上ニ關シ意見書ヲ作りテ訴訟書類ニ添附シテ判士長ニ交附シテ判士長判士ヘ判決開庭日時ヲ通報シ判決會議ノ際ハ之ニ列席シテ意見書ノ趣旨ヲ説明シ又判決廷ニ於テハ判士長ノ許可ヲ得又ハ命ニ依リテ更ニ被告人訊問其ノ他ノ證據調ヲ爲シ判決書ヲ作製シ再議再審等ニ關シ意見ヲ附シ刑ノ執行ヲ指揮ス、

三、録事ハ審問臨檢判決等ニ立會シ調書其ノ他訴訟ニ關スル一切ノ書類ヲ作り且ツ之ヲ保存シ及ビ軍法會議ノ庶務ニ服ス、

以上ノ外構成員ニアラスシテ海軍治罪法上軍法會議ト密接離ルヘカラザル關係ヲ有スル重要ナル機關アリ即チ長官之ナリ今

其ノ大要ヲ述ブレバ檢察官犯罪ヲ檢舉シタルトキハ長官ニ具申シ長官ノ審判命令アルニ非レバ軍法會議ハ審判ニ着手スルコトヲ得ズ又軍法會議ニ於テ既ニ審判ヲ爲ストモ長官ノ命令アルニ非レバ之ヲ宣告執行スルコトヲ得ズ換言スレバ軍法會議ノ行動ハ一ニ長官ノ命令ニ始マリ長官ノ命令ニ終ハルモノト云フヘク此ノ點ガ即チ軍法會議ノ特質ニシテ著シク通常裁判所ト異ナル所ナリ是レ軍法會議ナルモノハ司法裁判所ノ一種ニシテ其ノ行フ所ハ等シク國家ノ司法事務ニ過ギサルモ素ト軍隊社會ノ安寧秩序ヲ維持スル爲メニ設ケタル軍隊内部ノ機關ニシテ廣義ニ之ヲ云ヘバ其ノ行フ所ハ一ノ軍務トモ見ルヲ得ヘキガ故ニ從テ軍隊長官ハ軍務ノ統一調和ヲ計ルガ爲メニ斯クハ軍法會議ノ行動ノ終始ヲ監督スル必要アルナリ然レトモ一タビ命令アリテ審判ニ着手シタル以上ハ其ノ判決ニ至ルマデハ何等ノ權力ニモ制肘セラレズ一ニ法律ニ從ヒテ獨立自由ニ行動スヘキコト通常裁判所ト異ナルコトナシ是レ現行治罪法ノ解釋ナリ乍併今立法論トシテハ多少ノ異論ナキ能ハズ軍法會議ト雖モ等シク司法裁判所ナルガ故ニ通常裁判所ノ如ク全然他ノ羈絆ヲ離レテ獨立セシムルヲ適當ナリトストノ論多數ナリ過日海軍司法局ニテ起草シタル改正案ニハ幾分カ此ノ主義ヲ酌ミ起訴ノ際ニハ長官ノ命令ヲ要スルモ判決ハ命令ヲ俟タズ自由ニ軍法會議ニ於テ宣告スルコトヲ得ルコトニナリ居レリ、

茲ニ長官ト稱スルハ海軍大臣、各鎮守府長官、艦隊司令長官、同司令官、分遣艦隊司令官、合圍地司令官及ビ特設司令長官、司令官ヲ云フ(海治四、海軍臨時軍法會議法一)其ノ他外國又ハ戰地ニ數隻ノ艦船ヲ差遣スルトキ海軍大臣其ノ前任艦長ニ軍法會

議ヲ開ク權ヲ附與スルコトアリ此ノ場合ニ於テハ其ノ權限艦隊司令官ニ同シ、(海治一三)

次ニ構成員ニ非ズ又治罪法上ニ規定ナキモノニシテ軍法會議ノ職員タルモノアリ即チ海軍警査是ナリ警査ハ主理ノ命ニヨリテ令狀ノ執行犯罪ノ搜查又ハ法廷取締等ニ服スルモノニシテ通常裁判所ノ廷丁ト巡查トヲ兼ルモノニ似タリ(三十六年五月十日達第八十五號海軍警査服務規程參照)

第三節 職員ノ任命、

主理ハ明治二十七年二月五日勅令第十三號理事主理任用令ニ依リ任命セラレ録事ハ明治三十二年勅令第六十一號文官任用令第三條及ビ明治四十一年勅令第二百六十號海軍録事特別任用令ニ依リ海軍警査ハ三十二年五月十一日達第八十六號海軍警査及ビ海軍監獄看守採用規則ニ依リ任用セラル今其ノ大要ヲ述フレバ

第一、主理ハ主理試補ヨリ任用スルヲ本則トシ例外トシテ滿三年以上主理ノ職ニ在リタル者ハ直チニ之ヲ本官ニ任用スルヲ得又勅任主理ハ本勅令ニ依ラズシテ任用スルコトヲ得主理試補ハ主理試補登用試験ニ及第シタル者若クハ司法官試補タル資格アル者ヨリ採用シ海軍省若クハ海軍軍法會議ニ於テ一箇年半以上實務ヲ修習シ實務修習試験ニ合格シタル者ニアラザレハ本官ニ採用スルコトヲ得ズ、(明治三十年十月二十六日海軍省令第六號主理試補登用試験規則及同令第十七號主理試補出願并實務修習試験規則參照)

第二、録事ハ一般判任文官任用令ニ依ル外次ノ資格ノ一ヲ有スル者ヨリ任用スルコトヲ得、

一、録事登用試験ヲ經テ其ノ合格證書ヲ有スル者、
二、裁判所書記登用試験ヲ經テ其ノ及第證書ヲ有スル者、
第三、海軍警査ノ任用ハ試験及第者ヲ採用スルヲ本則トシ次ニ掲クル者ハ試験委員ノ詮衡ヲ經テ採用スルコトヲ得ルナリ、

- 一、現役ヲ過ギタル海陸軍下士タリシ者、
- 二、海軍警査又ハ海軍監獄看守ノ職ニ在リタル者、
- 三、三年以上警察ニ關スル職務ニ従事シタル者、

以上任用令ニ依リ任用セラレクル主理録事警査ノ補職ヲ命ズルハ總テ海軍大臣ナリトス而シテ以上ハ普通常例ノ原則ナレドモ艦隊軍法會議ニ於テハ司令官部下ノ將校准將校ヲシテ主理ノ職務ヲ行ハシメ士官若クハ下士ヲシテ録事ノ職務ヲ行ハシムルヲ得又臨戰合圍地ニ於テハ司令官部下ノ下士ヲシテ録事ノ職務ヲ行ハシメ合圍ノ地ニ於テハ司令官其ノ地所在ノ高等官ヲ以テ主理ニ充テ判任官ヲ以テ録事ニ充ツルコトヲ得特設司令長官又ハ司令官ノ下ニ置カレタル臨時軍法會議ニ於テモ亦然リ(二十八年二月二十八日法律第五號臨時海軍軍法會議法參照)

判士長判士ハ將校ヨリ任命スルヲ本則トシ准將校又ハ部外高等官ヨリ命ズルヲ變則トス而シテ其ノ任命ノ方法ハ次ノ如シ、
將官ヲ以テ判士長判士トナストキハ海軍大臣ノ奏請ニ依リ之ヲ勅命ス、
佐官ヲ以テ判士長判士ト爲シ尉官ヲ以テ判士ト爲ストキハ東

京ニ於テハ海軍大臣之ヲ命ジ鎮守府若クハ艦隊ニ於テハ司令官其ノ部下中ヨリ之ヲ命ズ、

艦隊ニ於テ若シ判士トナルヘキ將校缺乏スルトキハ准將校ヲ以テ之ニ充ツルコトヲ得、

鎮守府若クハ艦隊ニ於テ部下ニ非ル者ヲ以テ判士長判士ト爲スヲ要スルトキハ司令官ノ上申ニ依リ海軍大臣之ヲ命ジ又ハ命ゼシテ他ノ常設軍法會議ニ事件ヲ移シテ審判セシムルコトヲ得、

合圍地軍法會議ノ判士長判士ハ司令官其ノ部下中ヨリ之ヲ命ズ又臨戰合圍ノ地ニ在テハ司令官專任判士ヲ命ズルコトヲ得又合圍ノ地ニ在テハ司令官其ノ所在ノ高等官ヲ以テ判士ニ充ツルコトヲ得又臨戰合圍ノ地ニ於テハ判士二名ヲ減ズルコトヲ得臨時軍法會議亦同シ、

第四節 職員ノ除斥、

裁判ハ罪ノ有無刑ノ輕重ヲ決スル行爲ニシテ其ノ結果ハ直チニ人ノ生命身體名譽財產等ニ至大ノ關係ヲ有スルガ故ニ苟モ裁判ニ關與スル者ハ公平無私ノ見ヲ以テ公明正大ノ判斷ヲ下サ、ルヘカラス去レバ軍法會議ノ職員中裁判ニ關與スヘキ判士長判士主理ハ或ル事情ニヨリ公平無私ヲ維持スル能ハザル嫌疑アル場合ニハ之ヲ除斥シテ事件ノ審判ニ從事セシメサルノ必要アリ今現行海軍治罪法ノ規定(一八條一九條)セル除斥ノ場合ヲ擧グレバ次ノ如シ、

第一、身分上ノ關係ヨリ除斥スル場合、(海治一八)

判士長判士主理次ニ記載シタル者ナルトキハ其ノ審判ニ從事スルヲ得ズ、

- 一、被告人被害者及ビ其ノ配偶者ノ親屬、
- 二、被告人被害者ノ後見人、
- 三、告發人被害者及ビ證據ヲ陳述シタル者、

此等ノ關係アル者ハ己レニ利害ノ關係アリ又ハ先入主トナル等ノ關係ヨリ人情ノ弱點トシテ公平ノ見ヲ持スル能ハザル傾向アルヲ以テ裁判ノ神聖ヲ保ツガ爲メニ之ヲ除斥スルナリ、

第二、事件ノ關係ヨリ除斥スル場合、(海治一九)

一、原裁判ニ從事シタル判士長判士主理ハ再議及再審ノ裁判ニ列スルコトヲ得ズ、

二、海軍檢察ノ職務ヲ行ヒタル者ハ其ノ事件ノ審判ヲ爲スヲ得ズ、

三、艦隊軍法會議ニ於テ主理ノ職務ヲ命ゼラレテ(海治一五)審問ヲナシタル將校准將校ハ其ノ事件ノ判士長判士トナルコトヲ得ズ、

此等ノ場合ハ孰レモ先入主トナリテ公平自由ナル判斷ヲ下ス能ハザルノ嫌アレバナリ、

終リニ一言スベキハ除斥ハ判士長判士主理ニ限り録事警査等ニ及バザル所以ハ此等ノ者ノ職務ハ裁判附隨ノ事務ニ服スルノミニシテ本案事件ニ對シテ判斷ヲ下スコトナキガ故ナリ、

第五章 軍法會議ノ管轄權限、

二箇以上ノ軍法會議アルコト前既ニ述ブル如クナルガ故ニ各其ノ支配權ノ及ブ限界ヲ定メテ互ヒニ相侵サルルノ必要アリ其ノ限界ハ即チ管轄權限ナリ而シテ其ノ管轄權限ヲ定ムル標準ニハ次ノ三種アリ、

一、人ノ身分ニ依ルコト、

二、事物ノ性質ニ依ルコト、

三、土地ノ區域ニ依ルコト、

吾海軍治罪法ハ主トシテ人ノ身分ニ依リ管轄ヲ定ムルヲ本則トシタレドモ亦他ノ標準ヲ棄テタルニ非ズ要スルニ三者トモ併用シタルガ如シ以下各軍法會議ノ權限ヲ列舉スレバ次ノ如シ、

一、東京軍法會議、

東京軍法會議ハ次ノ事件ヲ審判ス、

一、司令長官司令官等ノ部下ニ屬セザル佐官以下ノ軍人軍屬其他海軍用船ノ乗員ノ犯罪即チ海軍本省直轄ノ人ノ犯罪、

二、海軍治罪法第二十三條第二項第三項ニ依リ艦隊ヨリ委託アリタル場合ニハ艦隊所屬ノ者ノ犯罪、

三、艦隊若クハ數隻ノ艦船外國ニ出發ノ後其ノ司令官若クハ先任艦長ノ部下ニ屬スル者内國ニ在テ犯罪發覺シタルトキ本人ノ所在地ト最モ近キ場合ハ其ノ犯罪、

四、大臣ノ直轄ニ屬スル俘虜降人ノ犯罪、

一三、各鎮守府軍法會議、

各鎮守府軍法會議ハ次ノ事件ヲ審判ス、

一、鎮守府司令長官ノ部下ニ屬スル佐官以下ノ軍人軍屬其他其ノ鎮守府用ノ艦船乗員ノ犯罪、

二、海軍治罪法第二十三條第二項第三項ニ依リ艦隊ヨリ委託アリタル場合ニハ艦隊所屬ノ者ノ犯罪、

三、艦隊若クハ數隻ノ艦船外國ニ出發ノ後其ノ司令官若クハ先任艦長ノ部下ニ屬スル者内國ニ在テ犯罪發覺シタルトキ本人ノ所在地ト最モ近キ場合ニハ其ノ犯罪、

四、司令長官ノ支配ニ屬スル俘虜降人ノ犯罪、

五、佐官以下ノ軍人ガ軍法會議所在ノ軍区内ニテ犯シタル管轄外ノ者ノ犯罪、

以上ノ内一、二、三、四ハ必然ノ管轄ニシテ拒ムコトヲ得サレドモ五ハ任意ノ管轄ニシテ必ズシモ審判スルヲ要セズ管轄軍法會議ヘ移送スルモ可ナリトス、

一四、艦隊軍法會議、

艦隊軍法會議ハ艦隊司令長官艦隊司令官分遣艦隊司令官ノ部下ニ屬スル佐官以下ノ軍人軍屬其ノ他從軍諸員及ビ艦隊用ノ艦船乗員ノ犯罪ヲ審判ス其ノ他長官ノ支配ニ屬スル俘虜降人ノ犯罪然レドモ艦隊ハ常ニ重要ナル軍務ヲ帶ビテ海上ニ在ルガ故ニ軍務ノ都合上往々軍法會議ヲ開設スル能ハザルガ如キ場合ナキヲ得ズ是ヲ以テ法律ハ委託ヲ爲スヲ得ルノ規定ヲ設ケタリ即チ海軍治罪法第二十三條第二項及ビ三項之ナリ、

二項 艦隊司令長官司令官分遣艦隊司令官ハ時機ニ依リ自己ノ管轄ニ屬スル者ノ審判ヲ常設軍法會議ニ委スルコトヲ得、

三項 艦隊ニ屬スル艦船長ハ事件ノ急速ヲ要スル場合ニ於テハ直チニ前項ノ處分ヲ爲スコトヲ得但シ其ノ事由ヲ速ニ其ノ艦隊司令長官艦隊司令官若クハ分遣艦隊司令官ニ報

告スルコトヲ要ス、

一五、高等軍法會議、

高等軍法會議ハ將官若クハ其ノ同等軍人ノ犯罪ヲ審判シ及
ビ普通軍法會議ノ判決ニ對スル再審ノ審判ヲ爲ス、

一六、合圍地軍法會議、

合圍地軍法會議ハ次ノ事件ヲ審判ス、

一、東京、鎮守府及ビ艦隊ノ軍法會議ノ管轄ニ屬スル者ノ臨
戰合圍ノ地ニ在リテ犯シタル犯罪、

二、從軍常人ノ總テノ犯罪及ビ何人ト雖モ海軍刑法ヲ以テ
論ズベキ犯罪、

茲ニ從軍常人トハ廣ク海軍ニ從屬シテ臨戰合圍地境內ニ在ル
軍人軍屬以外ノ者ヲ云フ前述シタル艦隊軍法會議ノ管轄中ニア
ル從軍諸員トハ其ノ意義ヲ異ニス從軍諸員トハ從軍ヲ許サレテ
從軍セル觀戰武官國會議員其ノ他官吏公吏又ハ之ニ准スヘキモ
ノヲ云フ、

三、合圍地境內ニ於テハ軍事ニ係ル民事及ビ刑法第二編第
一章中皇室ニ對スル罪、二國事ニ關スル罪、三靜謐ヲ害ス
ル罪、四信用ヲ害スル罪、五官吏瀆職ノ罪同第三編第一章
中謀殺殺傷ノ罪、毆打創傷ノ罪、擅ニ人ヲ逮捕監禁スル
罪、脅迫ノ罪、第二章中強盜ノ罪、放火失火ノ罪、決水ノ
罪、船舶ヲ覆沒スル罪、家屋物品ヲ毀壞シ及ビ動植物ヲ害
スル罪ハ總テ裁判ス若シ合圍地境內ニ裁判所ナク又其ノ
管轄裁判所ト通路斷絶セシ時ハ民事刑事ノ別ナク總テ軍
法會議ニ於テ裁判ス、

四、臨戰合圍ノ地ニ於テ專任判士ヲ以テ構成シタル軍法會

議ニ於テハ高等軍法會議ノ管轄ニ屬スル事件ノ外被告人
ノ身分ニ拘ハラズ其ノ犯罪ヲ審判スルコトヲ得、

五、臨戰合圍地司令官ノ支配ニ屬スル俘虜降人ノ犯罪、

一七、臨時海軍軍法會議、

臨時海軍軍法會議ハ次ノ事件ヲ審判ス、

一、特設司令長官若クハ司令官ノ部下ニ屬スル佐官以下ノ
軍人其ノ他從軍諸員及ビ海軍ノ用ニ供スル船舶ノ乗員ニ
シテ罪ヲ犯シタル者、

二、艦隊ヨリ委託シタル事件、

三、從軍常人ノ總テノ犯罪又何人ト雖モ海軍刑法ヲ以テ論
ズベキ犯罪、

四、其ノ司令長官司令官ノ支配ニ屬スル俘虜降人ノ犯罪、

第六章 管轄權限ノ移轉併合、

治罪上ノ必要又ハ便宜ニ依リ裁判管轄ヲ移轉シ或ハ併合スル
コトアリ其ノ場合次ノ如シ、

一、軍人任官就役前ノ犯罪ト雖モ在官現役中ハ其ノ所屬長官
麾下ノ軍法會議ニ於テ審判シ之ニ反シテ在官現役中ノ犯罪
ト雖モ免官若クハ現役ヲ去リタル後告訴告發アリタルトキ
ハ通常裁判所ノ裁判ニ附スルモノトス、(海治三十一條)

二、軍人二人以上共犯若クハ附帶犯ニシテ各其ノ管轄ヲ異ニ
スルトキハ先キニ審判ニ着手シタル軍法會議ニ於テ併セテ
審判ス若シ高等軍法會議ノ管轄ニ屬スル者ト共犯若クハ附
帶犯ニ係ルトキハ高等軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス陸軍軍人
ト共犯又ハ附帶犯ノトキモ亦同様ニシテ通常ナレバ先着手

ノ軍法會議ニ於テ審判シ孰レカ一方ニ高等軍法會議ノ管轄ニ屬スル身分ノ者アルトキハ其ノ孰レカノ高等軍法會議ニ於テ併セテ審判スルモノナリ、(海治三十二條)

共犯トハ二人以上共同シテ一罪ヲ犯スヲ云ヒ其ノ採ル所ノ動作ニ依リテ教唆者正犯從犯ノ別アレドモ數人一體トナリテ犯スモノナリ、

附帶犯ニハ刑事訴訟法百八十五條ノ規定スルモノニシテ二箇以上ノ犯罪アリテ其ノ間互ヒニ相關聯スルモノナリ即チ次ノ場合ヲ附帶犯ナリトス、

第一、同一ノ場所ニ於テ同時ニ一人又ハ數人ニテ數罪ヲ

犯シタルトキ、

第二、數人通謀シテ日時又ハ場所ヲ異ニシ數罪ヲ犯シタルトキ、

第三、自己若クハ他人ノ犯罪ヲ容易ニスル爲メ又ハ其ノ罪ヲ免カル、爲メ他ノ罪ヲ犯シタルトキ、

如此共犯附帶犯ハ相互ニ關聯アリテ孰レカ一方ニ併セテ管轄スベキ便宜若クハ必要アルガ故ニ斯クハ規定シタルナリ、

三、數罪俱ニ發シテ各其ノ管轄ヲ異ニシ又ハ審判中管轄變更シタルトキハ既ニ審判ニ着手シタル軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス、(海治三十三條)

數罪俱發各管轄ヲ異ニスルトハ例ヘバ佐世保勤務中甲罪ヲ犯シテ吳ニ轉勤シ吳ニテ乙罪ヲ犯シ吳軍法會議ニ於テ審判ニ着手シタル後未ダ判決前更ニ横須賀ニ轉勤シテ丙罪ヲ犯シタルガ如シ此ノ場合甲乙丙ノ三罪ハ總テ吳軍法會議ニテ併セテ管轄ス又審判中裁判管轄變更シタルトキトハ例ヘバ横須賀鎮守府勤務中

ニ於テ罪ヲ犯シ其ノ審判ニ着手シタル後海軍省ニ轉勤スルガ如シ此ノ場合ニハ依然横須賀軍法會議ニ於テ審判ス軍法會議ト通常裁判所トニ跨ル場合モ亦同ジ、

四、重罪輕罪ト俱ニ發シ若クハ重罪輕罪ニ附帶シ若クハ重罪輕罪ト認メ審判ニ着手シタル違警罪ハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス(海治三四)是全ク便宜ニ依ル、

五、合圍地軍法會議ヲ廢スルトキ其ノ軍法會議ニ於テ管轄シタル被告事件ハ通常ノ權限ニ照ラシ管轄軍法會議ヲ以テ其ノ管轄ト爲ス(海治三五)臨時海軍軍法會議ヲ廢スルトキ亦同ジ、(臨時海軍軍法會議法四、海治三五)